

資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館報



企画展
第2回

岩手金山と
大槌町金山の例

絵師 佐々木 藍田の世界

記念講演

講師 花石 公夫

(岩手県大槌町郷土史研究家)

日時 四月十七日(土)

午後二時から

岩手の金山
大槌町金山の例

金澤御山大盛之図

期間 ◆ 平成11年 3月27日(土) ~ 5月18日(火)

主催 ◆ 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 / 下部町教育委員会

第2回企画展開催にあたって

第2回企画展として『岩手金沢金山と絵師佐々木藍田の世界』を開催することになりました。今回の企画展で、なぜこれを取り上げたのか、その理由を述べたいと思います。

既に周知のとおり、わが国の金山研究は、これまで文献史学や鉱山技術史の領域のなかで進められてきましたが、ここ10年あまりの間に考古学による発掘調査、民俗学などによる周辺地域の民俗調査などが加わり、いわゆる学際的研究による多角的な角度からの研究が進み、急速な研究の発展が見られるようになりました。

下部町湯之奥中山金山遺跡の学際的総合調査・研究も、発掘調査で出土した考古資料や門西家所蔵民俗資料をもとに、中世・戦国期におけるわが国最初の山金発掘の初源的な姿から、その後の近世（江戸期）の金山経営の姿を、また、終末期の様子を知ることができましたが、その資料の解析にあたっては、江戸時代の絵師・佐々木藍田が描いた『金沢御山大盛之図』に負うところが大きかったわけであります。

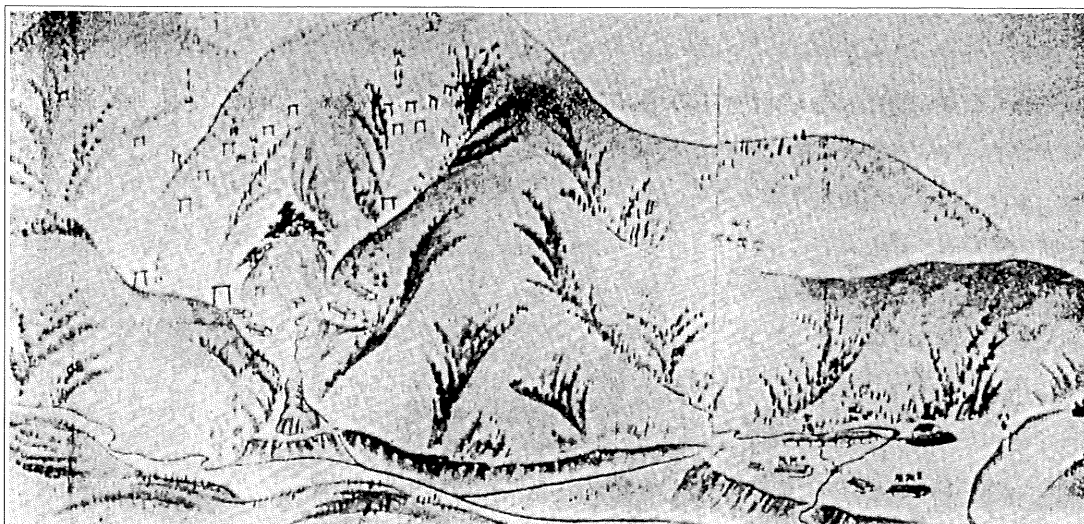
国立科学博物館における「日本鉱山文化」展において『金沢御山大盛之図』を最初に拝見したときに、使い方が不明だった「回転式ひき臼、つき石、フネ、セリ板」などの産金道具が、その作業工程とともに克明に描かれている『同絵図』を発見し、これまで想像の域を出なかった「空間」がもののみごとに復元されたわけであります。

下部町が「甲斐黄金村・湯之奥金山資料館」の建設を決め、その展示計画・構成の為に岩手県を訪ね、再び『同絵図』に接し、また、佐々木藍田の御子孫であります佐々木正太郎さん宅において、絵師であり紺屋業を営んでいた藍田の作品を多数拝見し、絵師としての鋭い観察力、描写の確かさを改めて知ることができました。

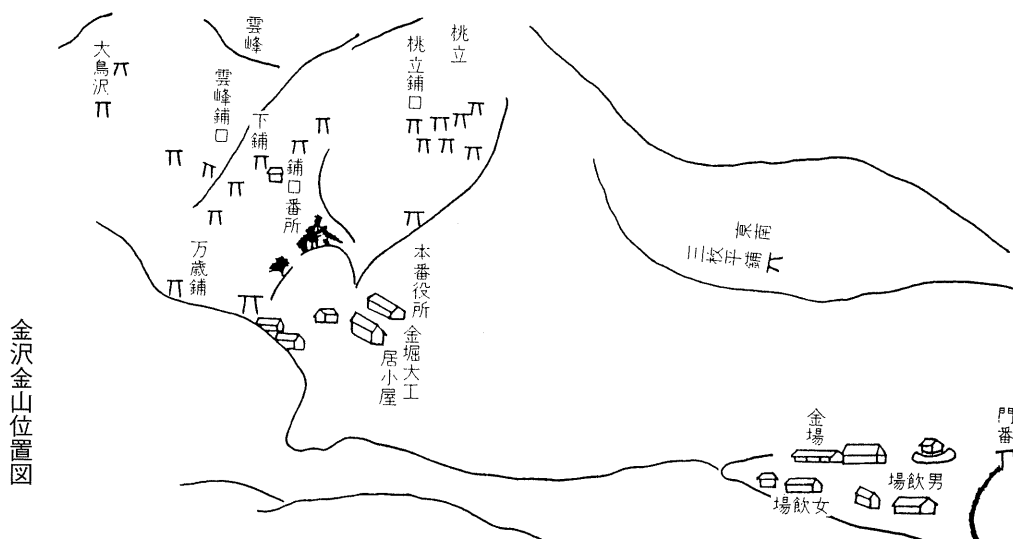
このようなご縁で、資料館が開館されたら早い機会に、岩手県大槌町金沢金山と絵師佐々木藍田の作品を公開し、その学恩に報いたいと望んで参りましたところ、今回、佐々木正太郎氏、花石公夫氏、岩手県立博物館、大槌町教育委員会ら多くの皆様（別掲）のご協力を賜り開催することが出来ました。深甚なる謝意を申し上げ開催にあたってのごあいさつといたします。

山梨県下部町『甲斐黄金村・湯之奥金山資料館』

館長 谷 口 一 夫



岩手金沢村概念図



金沢金山位置図

第2回企画展（解説）

岩手・金沢金山と 絵師佐々木藍田の世界

岩手・金沢金山のこと

岩手県大槌町金沢金山は正保2年（1645）に採金が始まったと伝えられ、最盛期はそれから数十年後の正徳年間（1711～1716）と言われています。

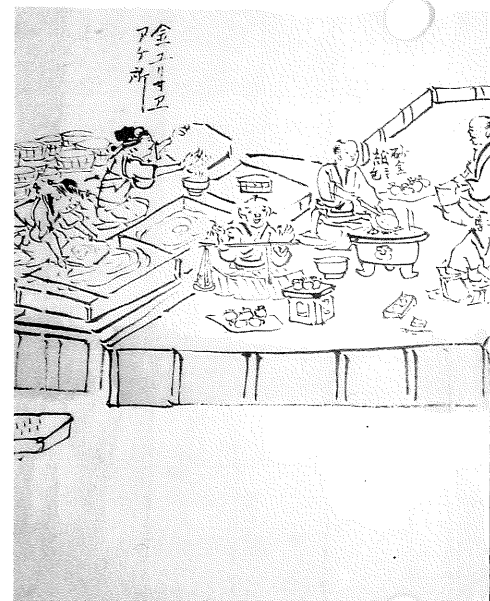
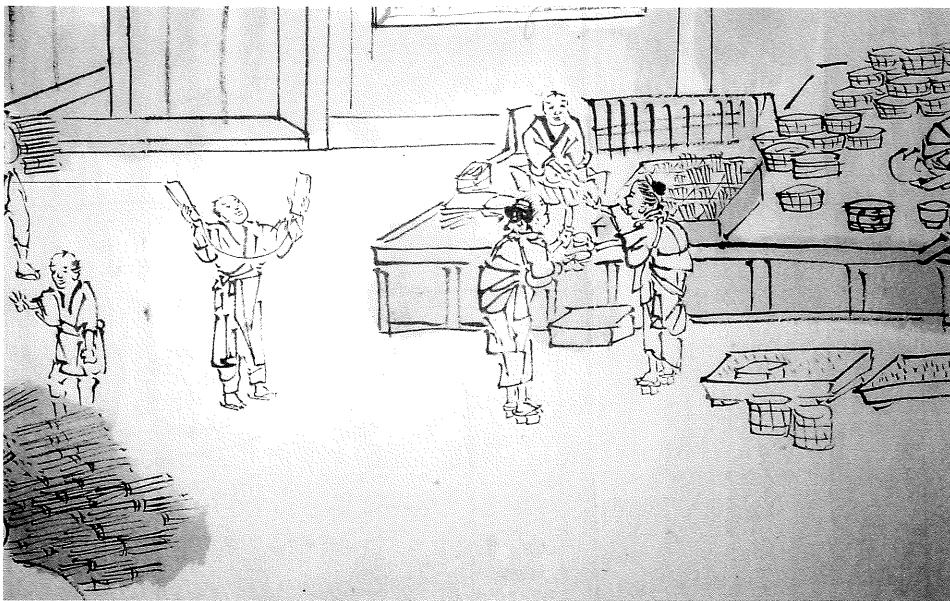
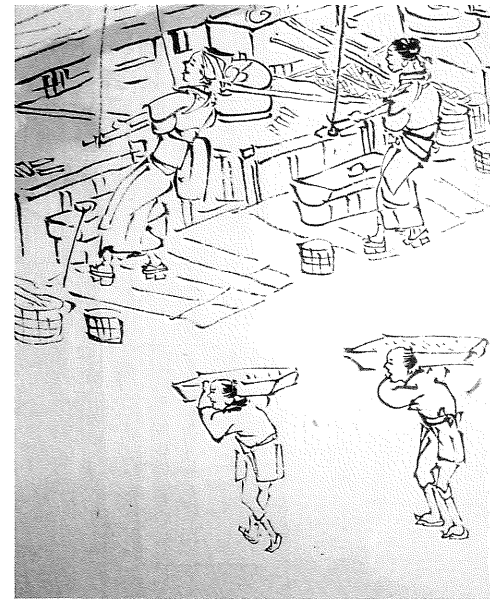
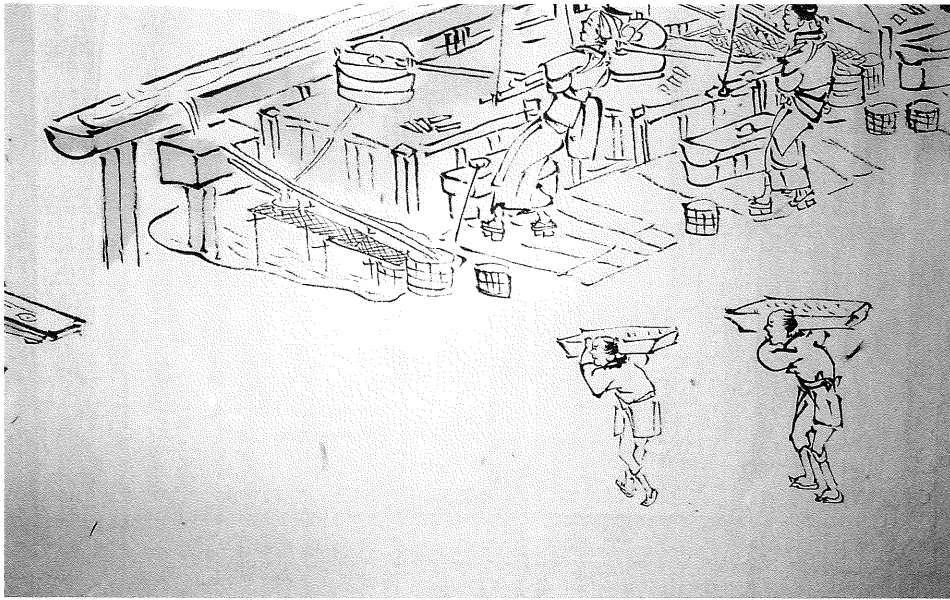
しかし、その後一端途絶え約1世紀の空間を明け、文政6年（1823）ころから再び俄に活況を呈する状態になったようです。

7頁の「岩手県金沢金山略年表」をみますと、山師平助の活躍が著しいこと、また、盛岡藩の金山稼業に対する姿勢が極めて優柔不断であったことが、その年表のなかから生々しく伝わってきます。

最初1年間10両で10年間平助に与えていた鉦掘権（働方証文）を、1年間500両で10年間という九兵衛にいと簡単に鞍替えする。しかし九兵衛は金が採れず3年で音をあげ、権利を入札で山師文助に売却、だが文助も金が採れず最終的に廃山同様にしてしまう。10年が経過したとき、平助が改めて働方許可を藩に求め採金が始めると、文助が未納していた5両の上納金の請求がなぜか平助にくる。

やがて平助は、再び山を活況に導くが、すると藩は盛岡藩手行金山（藩営）とし、平助を「御山守」という一役人の身分にしてしまいます。

今回の第2回企画展の導入部分は、この平助と藩、藩と九兵衛のこうした歴史事実を伝える「文書資料」の展示から始まっています。文書は平助のご子孫であります兼沢平也家に伝わる3点「乍恐奉願上候事2点、「覚」1点と、郷土史研究家花石公夫氏所蔵文書1点（遺金山証文）」です。



金沢御山大盛之図（部分）・岩手県大槌町佐々木正太郎家蔵・全長8.76m、幅27cm

このように、山師平助の採金技術が優れていたことが、こうした経過からも理解できるわけですが、その平助愛用の「蒔絵の提重」も兼沢平也家に伝わっており展示しています。

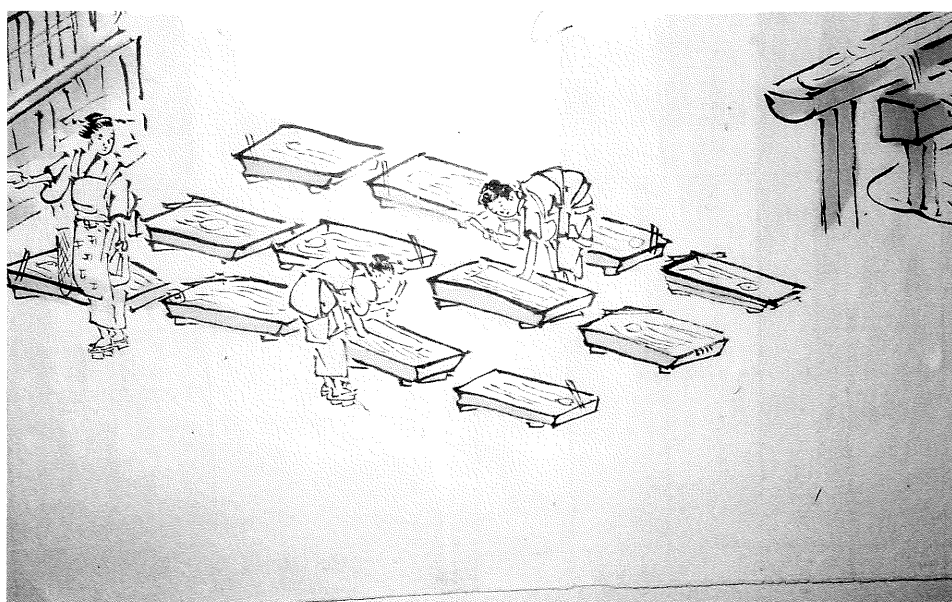
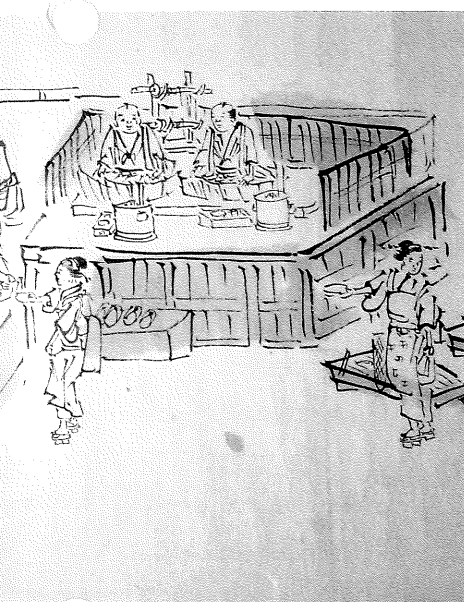
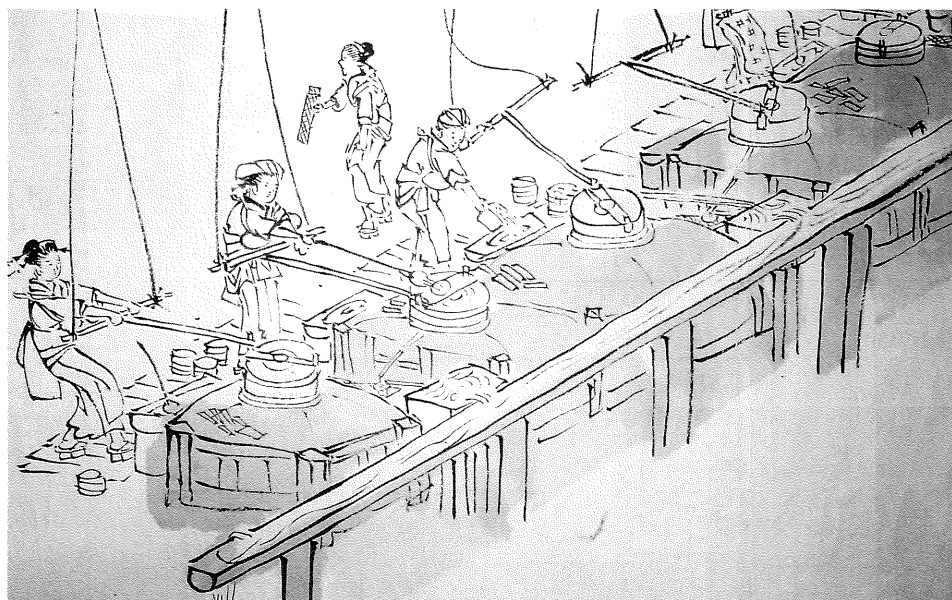
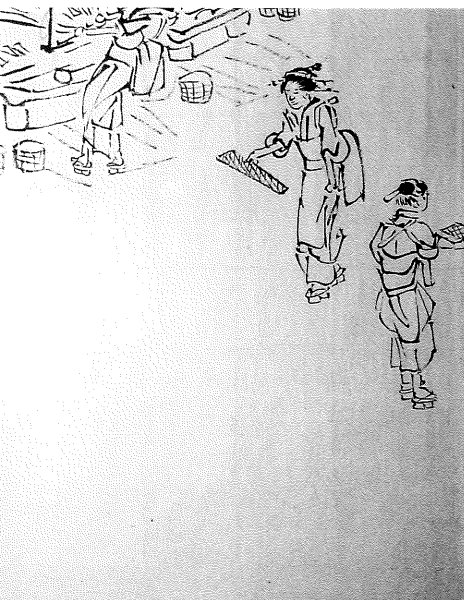
さて紆余曲折しながらも最後に金山を藩営にし、平助を「御山守」という一役人に取り立て、藩政末期の天保7～8年（1836～1837）における領内随一の繁栄をもたらした藩の采配は、山師九兵衛に振り回されながらも平助によって一応の決着がつけられ安堵した様子すら垣間見ることができます。

絵師 佐々木藍田のこと

さて、絵師佐々木藍田は慶応元年（1865）に60数歳で没したと見られますので、誕生は寛政12年（18

00）頃と思われます。絵師として確立された36～7歳の頃は金沢金山も藩営金山として栄えており、天保9～14年（1838～1843）には、金沢、橋野両金山見分けの為、幕府御普請役と金座役人の一行が立ち寄っています。

藍田の絵巻「金沢御山大盛之図」の最後尾には、東都御役人御普請方（渡辺角太夫様、下妻市蔵様、土谷弥市様、井ノ上富左右様）、御公儀金座人方（原善八様、板倉鉄之助様、小林虎之助様）、南部大槌通金山村金山御詰合之御役人様）等の役職氏名が添付されているところから、その頃の作品であることが推定できます。金山の操業の状態を、それら役人に報告するのに、絵図が描かれ使われたものと見



紙本着色／巻物、佐々木藍田（天保年間1830～1844）の作、大樋町指定文化財

られます。

従って「金沢御山大盛之図」は、この1830～44年（天保年間）藩営金山になったころの作品とみられます。6頁の「鮎」の絵は、弘化4年（1847）の藍田の作品ですから「大盛之図」が描かれた直後のものと思われます。

絵師佐々木藍田は、この時代に当地において紺屋（染色）業を営み、その業を営むために使った型紙や藍染めの染料である藍玉を残しているばかりか、数多くの絵も残しています。

それらの絵の多くを今回展示公開することができましたが、絵の一点一点をみましても、その観察力は鋭く、特に鳥、魚など動きの激しい被写体をもの

の見事に据え描写、また細部にいたる部分の観察や、色彩の観察も至るところに注記するなど、正確さを追求する姿勢には驚嘆に近いものが伝わってきます。

これらの藍田の作品をみますと「金沢御山大盛之図」の確かさを再認識させられます。

今回の企画展では、その佐々木藍田の全てを見ていただくために、可能な限りの点数を展示しました。藍田から数え5代目の佐々木正太郎氏、6代目の亮平氏をはじめ御子孫の御好意により初めて公開されるものです。

（谷口一夫）

時空を越えて

玉澤多賀

あれはいつごろだったろうか、いかにも重大な秘密を打ち明けるように父が話し始めた。「実は我々の祖先は隠れキリシタンで一族はすべて処刑され、残っているのはこの家と宮古に一軒だけなんだよ」「ふうん そう。」私の返事はそんなものだったような気がする。ほとんど関心がないと見た父は「だからどうって訳ではないが、多分闇からやみに葬られたんだな、墓なんてある訳がない。」「荒川という名だったが処刑を恐れたんだねえ、途中から佐々木になっているよ。」ずいぶんと昔の話だと思いながら、ほんの少し関心を持ち始めた私に「先祖っていうのは大切なんだ」

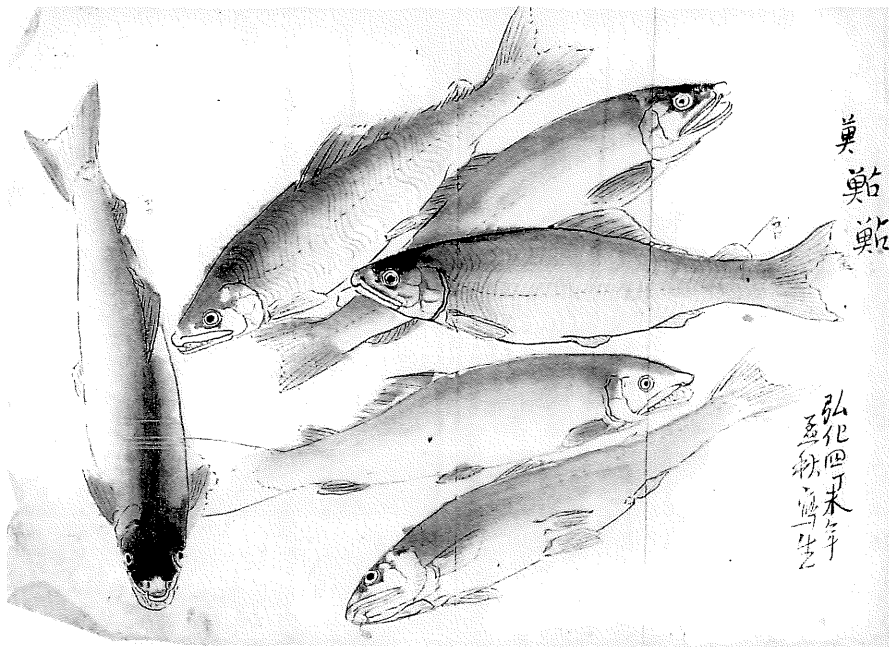
そう言ってしばらく天井を見つめていた。「できたらいいんだよ、何時かは捜してお参りして欲しいと思ってね。」そんな父との会話だったがキリシタンと言う時に声を一段と低くするの

で、どこか秘密めいて時代がかかっていておもしろかった。

父が亡くなって数年、私は夫の講演会のため下閉伊郡山田町荒川というところに行った。車から下りると、初めての土地に関わらず、懐かしいような優しい不思議な気持ちに包まれた。「あらかわむら?。」途端に父の顔が浮かんだ。父が捜していた荒川の地、まさかこんな近くにいると思いながら日程を終え、最後に後援会のT氏にこの村に隠れキリシタンの言い伝えなどありますかと尋ねてみた。T氏は待ってましたとばかり堰を切ったように村の歴史を話し始め、

最後に、昔奥さんのご実家に電話を差し上げこのことを話しましたが、ピシャリと電話を切られたと大笑いなさった。

父がキリシタンと声をひそめて話したことがいかにもと思えてきた。処刑がなされたと言われる場所に案内して頂き、更に荒川殿という名で祀られているお堂をお参りした。自然石の墓碑は15名の戒名で、中には童子童女が4名もある、手を合わせると体中から涙が吹き出すような悲しさが襲ってきた、周りの人に恥ずかしいぐらい涙が出る、しかし心から悲しいと言うのでもない、何とも複雑な気持ちでその場を後にした。それから急に私のルーツ捜しが始まった。私が父の話に無関心ただただで、あらためて記憶をたどると、T氏の話とほとんど合致し、すると多くの謎が解け始めた。



父がひそかに相当調べていたのがわかる。しかし、「荒川村鑄錢罪料にて斬首の極刑に処す」という文字にぶつかって愕然とする。罪人で斬首の記述にあり、昔賢気の父はここで調査を止めたのだろう。

子供が鑄錢罪に問われる訳が無い、当時の南部藩では「私錢鑄造禁止令」にかこつけキリシタン弾圧がなされていたらしい。

「西も東も黄金の山」と歌われた南部牛追い唄も、「金山と隠れ切支丹」の結びつきで、他にも悲しい話が隠されてあるかも知れない。15名の墓碑は、処刑50年後にようやく川原石を用いて立てられたそうで、50年という長さはよほど怖い出来事だったと想像できる。再び荒川殿をお参りした時、初めて先祖を思い、父を思い心から泣いた。その後、平成9年山田町荒川の皆様のお力をお借りして、荒川殿

350年遠忌の法要をしていただいた。やっと父の「先祖を大切に」の言葉に応えることができたような気がした。

その時親戚の一人が、そっと処刑場跡の土を持ち帰り、ローマのバチカンの中庭に埋めて来たと言った。いぶたつてから知らされた。ルーツ捜しのなかで、それぞれが心の中に、それぞれの宝ものをもらった。

後日談になるが、今年の3月から5月まで、山梨県下部町の甲斐黄金村湯之奥金山資料館で金沢金山

と佐々木（荒川）藍田の世界展が開かれるとの連絡が入った。岩手の「金澤御山大盛之図（絵巻）」を描き残した人だが、荒川の姓を名のることを恐れて、佐々木となってとても苦勞をした絵描きと父から聞いたことがある。

金山の資料としては相当貴重なものらしいが、時空を越えて、神様が汚名挽回のご褒美をくださったと思ひ、なんだか私も書いてみたくなった。

（衆議院議員玉澤徳一郎氏夫人）

岩手県金沢金山略年表

1645（正保2）	金沢金山の採金始まる。
1711（正徳1）～1716（享保1）	このころ金沢金山盛る。
1733（享保18）	八日町清右衛門、橋野笹平の古間歩の見立て願を出す。
1800（寛政12）	このころ政吉（藍田）誕生。
1823（文政6）	山師平助・藩から「草分け証文」（試掘）許可を受ける。
1824（文政7）	山師平助・藩から10両で「働方証文」を受ける。
1825（文政8）	藩は山師平助に「金山稼業停止命令」を出す。
	藩は織笠村九兵衛（昆仁兵衛）に年500両で文政8年から10年間、雲峰金山の採掘権を与える。
1827（文政10）	九兵衛（昆仁兵衛）は、思うように金が採れず、残り7年間の採掘権を入札で八日町の山師文助に売却。しかし、文助も成果をあげられず廢山同様となる。
1835（天保6）	10年間の九兵衛に与えた請山期限が切れる。 直ちに山師平助は「働方許可」を藩に申請、許可を得る。
1836（天保7）	文助が藩に上納すべき5両の請求が盛岡藩役人左和田文四郎から平助にくる。
1836～1837（天保7～8）	ふたたび山師平助の手によって、山は息をふきかえし発展。藩は、盛岡藩手行（ておこない）金山（藩営）とする。山師平助は藩から「御山守」という一役人の身分を下命され藩政末期領内随一の繁栄をもたらす。
1838（天保9）～1839、1843（天保14）	金沢、橋野両金山見分けの為、幕府御普請役と金座役人の一行が立ち寄る。
1855（安政2）	「御山守」平助没。同家子孫はこの経緯から明治年間に至るまで平助を襲名、金沢金山と関わった。平助の先代平助（金沢家より分家1830没）、2代目平助（栄助・御山守1855年没）、3代平助（初め平蔵、1864没）、4代平助（宇太郎1878没）、5代健次郎、6代兼沢平吉（昭和22年～金沢村長）。
1865（慶応1）	絵師佐々木藍田没60数歳？（大勝院過去帳には慶応元丑年瑛玉藍田居士六月十日、山田村寺旦中、政吉）とある。

出品（借用）資料一覧表

（順不同・敬称略）

出品資料	資料提供者	出品資料	資料提供者
金澤御山大盛之図 1点	佐々木 正太郎 亮 平	金沢村古図 1点	佐々木 正太郎 亮 平
画（1枚もの） 42点		軸（十六善神） 1点	
画（編綴もの） 8点		遣り木 1点	
画（巻物） 2点		かみしも 1点	
道中記（解説書） 1点		ねこざ 1点	
書画集 16点		軸（大槌支配金沢折合沢、高瀧之図） 1点	小 国 健太郎 隆 男
財布 1点		画（藍田筆意） 1点	
藍玉 2点		画（金想父） 1点	
筆 1点		るつぼ 1点	兼 沢 喜 重 一 夫
筆入 1点		唐臼 1点	
軸 3点		写真 3点	兼 沢 喜 蔵
落款印（大小箱入） 15点		提重 1点	兼 沢 平 也
染色用型紙 14点		古文書 3点	
法要の冊子 1点		軸 1点	花 石 公 夫
かつちゃ 1点		古文書 1点	
あおりべら 1点		軸（孔雀雌雄一双） 2点	佐々木 富 泰
写真（金沢折合沢高瀧） 1点		軸（雨中漁父） 1点	

今回の企画展を開催するにあたり、次の方々に御協力いただきました。

（順不同・敬称略）

佐々木 正太郎
亮 平
（岩手県・大槌町）

佐々木 富 泰
（埼玉県・大宮市）

小 国 健太郎
隆 男
（岩手県・大槌町）

玉 澤 多 賀
（岩手県・盛岡市）

兼 沢 喜 重
一 夫
（岩手県・大槌町）

名 村 栄 治
（岩手県・大船渡市）

兼 沢 喜 蔵
（岩手県・大槌町）

遠 藤 泉
（岩手県・釜石市）

兼 沢 平 也
（岩手県・大槌町）

平 山 憲 治
（岩手県・大船渡市）

花 石 公 夫
（岩手県・大槌町）

大槌町教育委員会
（岩手県・大槌町）

岩手県立博物館
（岩手県・盛岡市）

岩手日報釜石支局
（岩手県・釜石市）

読売新聞大船渡通信部
（岩手県・大船渡市）

山梨日日新聞峡南支局
（山梨県・増穂町）

編集後記

第1回企画展が終わり、2回目の企画展準備に追われ、気付くとあっという間に桜の開花情報が聞かれる季節になってしまいました。

企画展がある度にたくさんの人達の御協力を頂き

ますが、同時に手を煩わせ、また御迷惑もおかけしてしまい、大変申し訳ないと感じています。

館としてはそのご恩に報いるよう努力してまいりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

今回の企画展は5月18日まで開催していますので、こちらもぜひ御覧ください。

資料館だより

第8号
平成11年3月25日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015